

# 一泉

発行所  
〒921 金沢市泉野出町  
3丁目10-10  
金沢泉丘高等学校内  
一泉同窓会  
電話(0762)42-0211  
定価 1部 100円  
(株)橋本清文堂

## 旧金沢一中本多町

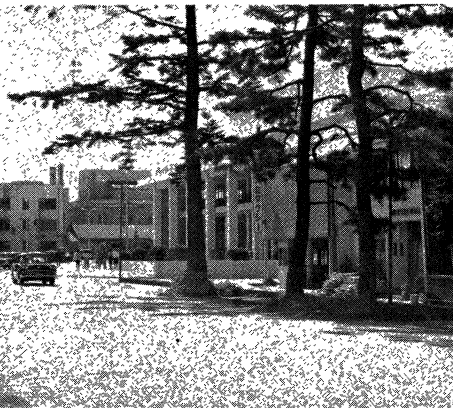
### 校舎を偲んで

母校、泉丘高校がこの度創立九十周年を迎え、泉野原頭に堂々五階建の偉容を誇る校舎の新築をみ、目下建設中の講堂と共に来春には県下最大の設備をほこる学校が出現する運びとなりました。

この時に当り、現泉丘高校の前身たる旧金沢一中の旧本多町校舎のあとを振り返るのも又意義あることかと思ひ、その跡を回顧してみたい。

旧金沢一中の発足時の新道校舎は明治十三年に大谷派が新道通りの西福寺西隣りに新築し、加賀教校から共立尋常中学校、大谷尋常中学校へと使用されたもので、当時は道路に面した狭い校庭をはさんで正面に講堂、左手に教室(二階建一六教室)右手に管理棟が並び、講堂は小規模ながら欧風の意匠を加味した洋館造りであったが、教室は一室の収容力が三十五、六人程度で窓が障子張りの暗い貧弱な校舎であり、運動場は近くの専光寺境内を借りていたという。この為、金沢一中は開校当初より、その校舎の新築は緊急課題であった。

しかし、新築の計画は遅々として捗らず、明治二十八年に至って、ようやく兼六園に南接する出羽町の長谷川邸の所有地(現兼六園南部)が新築予定地として決定されたが一部



から反対論が出され計画の変更を余儀なくされ、二十八年暮に下本多町を敷地として決定した。

県は二十八年度予算から同地の買収費として一一、三六四円余を支出することとなり、校舎の建設が始まった。

初代校長の富田輝象の後任の野田藤馬校長が着任して間もなく本多町校舎の全工事が完了し、三十一年一月から使用されはじめた。工事は当時の新登町の新保外次郎の請負いで行われ、当初の予算は二十八年度から三ヶ年の継続出費で四八、六二一円余(うち土地買収費を含む)を見込んでいたが、経済界の変動によって予算を大幅に上廻り、工費総額は六一、四四六円余(うち土地買収費一六、三一九円)にのぼったといわ

れる。

新校舎は鬱蒼たる本多の森を背景に武家屋敷の土塀が続く旧藩の重臣本多安房守家中の屋敷町に位置し、広坂から南に走る下本多町の細い通りに用水が西に屈折するあたりに細い菱目格子の扉をつけた意匠の門があり、門内右手の門衛所をおおうように柳の老樹が枝を垂れていた。木造二階建の校舎は北館と南館に分かれて並立し、その間に生徒控所、講堂、体操場の三棟が設けられ、校地面積は七六五七坪、校舎建坪は一、二八一坪を算えた。現在泉丘校舎が敷地一四、一四六坪、旧校舎建坪一、七三七坪に比べれば如何に狭隘であったかが知られよう。

明治三十年十二月より昭和十二年までの四十年間、金沢一中校舎として親しまれてきた本多町のあたりは校舎が現泉野出町に移転してから四十五年を経た今日では面目一新、変貌し往時の校舎のあととは新しい施設が建設され、当時の付属運動場のあなどには観光会館が威容をあらわしている。現在、当時の一中校舎の面影をさがし求めることは困難であり、僅かに大通りの中央に残された一本の梅と二株の松、そして背後の奥深い木立だけが往時の学び舎を偲ぶよすがになっているに過ぎない。

まことに隔世の感をきんじ得ない。

# 「一泉」第八号によせて

## 泉丘校蔵書解題目録の

### 編集を終えて (5)

#### 蓮如上人と北国

山森 青硯

(一 中三十三回卒)

「蓮如上人と北国」と云う書物が、泉丘校書庫内、多くの稀観書に混つて挿入してあった。是は名僧石川舜台師著であり、四六本、大正六年四月廿日刊、約二百余頁の小冊子である。舜台師の著作中、寔に貧弱装釘本である。然し乍ら師百点に余る著作中、唯一点の郷土史書であつた。

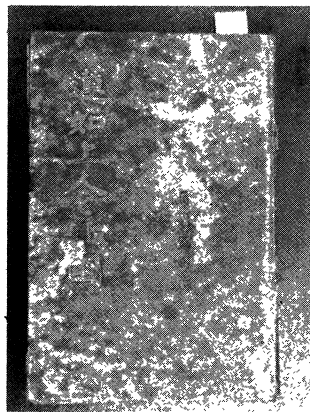
此の書が我が郷土史書として最も特異とする処は、次の三点に絞られたい。

1、「蓮如上人吉崎居住以前の加賀」項中、五十六部落悉く、其土豪を列挙してあること。

2、「上人の人格」項中子息二十人悉く所載し、一々解説をほどこしてある。

3、「結論」項中、自金沢至東都鐵道敷設の件、今日で言う北陸新幹線の事を述べる。

本書発刊以前の蓮如並に向一揆本は極めて少数であつた。特に我が



郷里加賀のみの土豪を、かく迄に抽出して蓮如の本論にうつつてゐる。此の一項だけで加賀の動揺が一目瞭然と読者に映ずるであらう。百万の喋々を並べるより、主眼を覚るのに便利である。「上人の人格」項に

二十七人の子女を有したる上人は、意外にも一夫一婦也。世上或は多婦にして閨門の不整齊なる、或る幾人の妾ありしやを憶測する者あるが如くなるも、之を査覈すれば夫人の死亡の為に継室を入れられたるに過ぎずして、妻妾並存の如きは、上人には無き所なり。

とある。以上の如く、妻妾並べ置かれし事実全くなし。あまつさえ、上人吉崎御滞在中、年間は妻妾共に存せず、是れただけでも閨門の肅整なりしを知る事が出来よう。紙面の関係上二十七人の列名出来ないは残念であるが、第二十三番目男子が有名な実悟である。此のかたの下に左記註記がある。

兼俊 本泉寺蓮悟養子願得寺住持実悟記の著者 天正十一年寂 九十二歳 明応元年生上人七十八歳とある。然かも実悟は上人二十七人の子の中に最も秀である。のみならず実悟真宗立ち始めて以来、最も優れた学僧であつた。果物は初物と云い一番成りは一番尊ばれてゐる。然るに実悟廿三番目の子息である。そして最も秀とは如何であらうか。

近時我が金沢四百年を不当とし、新進は金沢五百年に謳歌してゐる。決して占領者を褒めるのではないが、結局其後継者の施政如何によるのである。同じく一九一頁に

加賀動もすれば百万石の旧大藩を誇る。何ぞ知らん。吾人の祖先は協同合力して外難を攘ふの念なく、為に佐久間盛政の為に全国を奪取され、孺子をして名を成さしめ、前田利家を主人公とするに至れり。前田氏は外来の人也、我は彼に占領せられたる也。前田氏は榮譽也。然れども吾人は恥辱也。前田氏の政其宜しきを得て、吾人は十世三百年其治下に生活せり。其恩義は感謝せざるべからず。然れども被

占領者なる吾人が占領者を謳歌するは、吾人祖先を罵るに近し。自ら慚愧たらざるを得んや。舜台師は前記の欠を補うたために、和協合同せなければならぬと

喝破してある。即ち我の長を以て他の短を補い、他の長を以て我の短を補う。そして彼比相補うて初めて完全を得ると。然るに加賀国人の特性として旧習割拠各立して、前記相補うことをなさず、其地形と共に固守、因循の個性が今日迄続いたのであると。其因循なる遠因を左記述べてゐる。

按ずるに、此原因を為す者三あり、一に曰く地形、二に曰く海港、三に曰く雨雪、所謂地形は東南に白山立山の山脈峰嶺蜿々として全国の東南を屏障し、西北は日本海に臨む。兩京は勿論何の国に至らんとするも、南は越前を経、北は越中を経て、迂回幾十里を徒涉せざれば目的地に至ること能はず。此山形は加賀の東南大屏風を作り、大屏風を以て囲掩して日本の表面、即ち東海東山の諸国より西北に逐窺せられて、隱居的天地に造られたる者の如し。

所謂海港とは加賀に良港湾なく、海浜は尽く沙汀にして海に注入する河口の如きも、海沙の為に推積埋湮せられ、僅に漁舟の出入に便するに止りて巨船は如何共すべからず。況や幾千噸を算する大火船をや。しかのみならず加え冬期の西北風は波濤洶涌人をして畏縮せしむ。夏期と雖も、日本海は太平

洋面の穏泰なるに比すべからざるをや。

所謂雨雪とは、雨量甚だ多くして随って降雪甚だ深し。比三原因の第一第二は国外へ出るを喜ばざるの性情を造る者にして、第三は隣里比屋をも往訪を好まざるの風氣を為す者とす。而して是皆自家自村を唯一の天地として、小区域に甘んじて、他の至大至広の天地あることを思はざらしむる者にして、此天地の間に生育して百世の遺伝性を為す。国人を挙げて国外に出るを喜ばず。此中に生れたる小豪傑小英雄一村一庄を占めて、此小区間に跳梁して其処を得たりとす。地勢海港雨雪の此氣を養成すること数千万年、終に此割拠各立の風を成して以て今日に至る。とある。是程うまく北陸の地勢と人情を描写した文章筆者見たことはない。先見者舜台いち早く京都本願寺に入る。日本仏教を世界の仏教にすべく、明治五年渡欧をこころみた。此れ真宗僧侶の欧州行の嚆矢であった。師は今日の政治家の如く、抽象言辭ではなかつた。次項で其の具体案を述べてみよう。

之を征服するは一、犀川の沿岸を経て倉谷に至り、倉谷より大隧道を開鑿して飛彈より美濃に出る也。此鐵路を成功せば加賀人初めて日

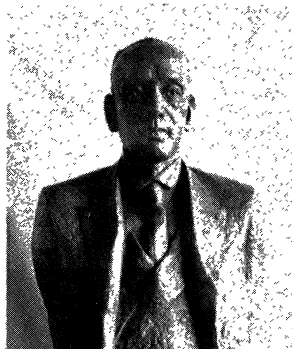
本の隠居種族たるを免るべし。(中略)猶ほ更に考うるに倉谷より隧道を造るよりは、小立野は日尾の上なる高尾山(富樫の高尾に非ず)より連続せる山頂の遙に走りたる者なれば、小立野より土清水、鷹栖、菅池、駒帰、寺津を経て、日尾二又を過ぎ、赤堂山より猿ヶ山大獅子山の間を出て、赤尾町に出れば白川は指顧に在り、此路は山頂を経過する者なれば隧道を要するは少く、赤堂山は比較的大隧道を要すべし。

ロッキーマウンテンを通過するパシフィック鉄道の例によれば為しがたきに非ざるべし。とある。舜台師犀川(犀川)の産、前記地勢は熟知の人。明治渡欧帰途、法主松本等は直通で帰朝したが、舜台、成島柳北二人はアメリカ經由帰朝した。是れ前記ロッキーマウンテン通過パシフィック鉄道を研究したかつたからであらう。彼の出生は六十年早過ぎた。時の総理大臣大隈重信、彼の抱負を愛し、文部大臣の就任を要請した。舜台答えて曰く、「総理ならば就くが、文部大臣は否」と。舜台昭和六年歿す。享年九〇歳。英傑を生んだ金沢、今北陸新幹線で悩んでいる。

### 富田初代校長の胸像が完成さる

#### 胸像が完成さる

来年に迎える母校創立90周年記念事業の一環として計画された初代校長富田輝象先生の胸像が、この程半年がかりで完成され、学校に送られてきた。胸像は高さ約75センチで往時の先生のお姿を彷彿とさせるものがある。来年の十月十五日の記念式の際に、盛大なる除幕式が計画されている。



初代校長 富田輝象氏胸像



### 一泉短歌

#### フラメンコ

赤井直恭

(一中三十二回卒)

洞窟の白壁を背に踊る娘の細身の肩にライトまぶしき(82・12月グ  
ラナダにて)

髪ながきジブシー娘の白き肌 ライトに映えてあえかなムード

タップふむ少年の脚しなやかに穴倉舞台に楽の音こもる

ジブシーの踊りたちは楽しげに私語かわしつつけふも踊るか

アランプラの回想曲をひくひとは八十翁ときく花やぎの夜

地の果てとふロカ岬にわたちてアフリカのかた荒波を追ふ(リスボン郊外にて)

崩れかかる白壁の家 石だたみ迷路に遊ぶ子らの嬌声(リスボン・アルファマ地区3首)

道尽きて突然ひらく窓の扉に老婆はたてりにこりともせず

哀愁のこもれる町よ夕ぐれて紙屑がまふなつかしきかな

陰湿な石の小部屋の僧堂に自耕といのりのくらしを偲ぶ(カプシュ

シュ修道院)

